

## 女性と地理学

斎藤 毅

## 1 はじめに——学問と性差

学問の自由は男女の別なく保証されているのに、不思議と性差による嗜好とでも言うべきものが厳然として存在する様である。家政学はともかく、心理学や国文学、或いは史学などでも女流の研究者はかなり多いし、どこかの大学でもそれらの学科には女子学生が大勢集まり、卒業式ともなると大変華やかである。

さて、地理学の場合とはみると、これは何故か、概して女子学生の人気の芳しからぬ学科の一つであり、研究者ともなると、まさに暁の星の如き観がある。これは別段、山野を跋涉できる“男まさり”が期待される余り……と言うことでもなさそうである。

大学のスタッフに女性の進出が稀なのは、差当り、“残念”程度で済ませるが、こうした学問への嗜好が中学や高校の教科のレベルでも著しいとなると問題はいささか深刻となる。実際、大部分の学校で、女生徒の地理嫌いには頭を痛めているらしい。すでにその実態はかなり明らかになっているが、その原因や対策は、となると別段の名案も浮ばないようである。これまで、そうした問題に真正面から取り組んだ研究者が極めて少なかったことにもよる。

## 2 世界像形成と知覚圏

筆者がこうした問題に関心をもちはじめたのは、文化地理学や、そのフィロソフィーともいえる人文主義的地理学の方法を導入した地理教育論の研究に取り組むようになってからである。

現代の小・中学校の中心的な目的は、要するにアニメズムを基礎とする児童世界観の体制下にある子どもを、科学的世界観に無理なく導くことにあるといえよう。地理教育は「世界像」を道具に、これに参加することになる。

この世界像の構造的な研究が近年次第に盛んになってきたが、一般に世界像は自我(Ego)を中心に、認識圏、認知圏、知覚圏としてひろがる、極めて不規則な出入のある同心円状に形成されることがわかってきた。従来の地理教育は、この認識圏をひたすら拡大し、無理やりに知覚圏をも包み込もうとしたところに、一つの誤りがあって、十分成功しなかったようである。人間にとって、

知覚圏はイメージの源泉として、さらには人間の成長にかかわる多様な行動を促す大切なものだったのである。

例えば、小学校3～5年生にみられる探検行動も、この圏の存在とかかわるものであり、どうやら知覚圏と認識圏は相互に作用し合って成長していくものであるらしい。

ところであらゆる世界観は、現世と共に他界——すなわち死後の世界を備えているものである。しかし、科学的世界観だけは、現世ばかりであり、そうした意味では極端に不完全なものとなっている。これは勿論、現代の科学の方法では、他界に踏み込めないためである。従って、科学的世界観の体制下にありながらも、多くの人には何等かの宗教的世界観にある他界を借用して、主観的に両者を統合し、一応の心の安定を得る便法をとる。こうした視点に立てば、科学的世界観の世界像にみられる知覚圏は、実はその他界にまで続いているともいえよう。

一般に、知覚圏下にある児童の世界像では、現世と他界とが未分化であり、しばしば両者は混在し、しかも可逆的な構造をもちがちである。大した理由もなしに行われる子どもの自殺は、いわば両者の未分化の結果とみることができる。

さて、この「知覚圏」への対応には、すでに少年期の頃からある程度の性差があらわれるようである。すなわち、男児は、一般にあえてその領域を勇敢に探検し、そこを認識圏に変えようと試みる。これが前述の探検行動である。今まで、途中までしか乗ったことのなかったバスの終点まで、こっそり一人で行って大いに満足して帰ってくる——などがこれにあたる。この年令で多くの男児が体験する海外の郵便切手の収集なども、その代償行動といえるかも知れない。さらに年令が進むと、現世と他界の問題をSF的に解決しようとする。松本零士の『銀河鉄道999』の成功の秘密もこのあたりにありそう。これに対して女児は、発達に伴って、この「知覚圏」を知覚圏として次第に自覚してはいくが、それをいつまでも保存したがる。あたかもそこを秘密の花園であるかのように、大切に持ち続けようとする意識が働くらしい。

明らかにアニメズムの世界ともいえるあのサン・リオのキャラクター商品を、大学生でも結構愛用しているのはその証拠ではあるまいか。最近、日本に上陸しはじめた例の「キャベツ人形」なども、多分、彼女達は競って

買い占めるだろう。これらはいずれも知覚圏の友達である。従って、絵本の最大の顧客であり、愛読者であり愛蔵者が、女子学生やOLだと聞かされても、別段驚くに値しない。知覚圏を余すところなくあばき出そうとする無精な地理学は、このため女子にはどうしても敬遠されがちになるのである。

### 3 《生活様式》の再吟味

これまで述べてきたような視点に立つ限り、女性に地理学を期待するのはかなり絶望的に思われてくるが、実はそうとばかりはいえないのである。それどころか、少なくとも人文地理学に関する限り、実際にはむしろ女性に積極的に受け入れられる素地があるともいえそうである。

ブラージュ以来、人文地理学のキー・ワードの一つと考えられてきた《genre de vie》は、通常《生活様式》と訳され、そのイメージが余り明確ではないが、その意味するところは、要するに「文化」であり、「民俗」に相当するものといえよう。従って、料理も裁縫も、育児も、凡そ家政学の研究対象となるものは、本来全て人文地理学の研究対象ともなり得るものである。農業も、牧畜も、漁業も、もちろんいずれも経済現象としてとらえることはできるが、それらは同時に、料理や衣料の材料を入手するための行動であり、基本的には生活であり、文化としてみることでもある。

いささか二段論法めくが、家政学が今なお、女性から絶大な支持を得ている以上、同じ材料を扱う人文地理学も当然、女性から熱烈に歓迎される学問となっても不思議はないのである。それにもかかわらず、人文地理学が

これまで女性に敬遠されがちであったのは、それを社会科学化させることが発展であるとする奇妙な理論が通念化していたためであり、これまでの日本の地理学界にも一ばんの責任があるように思われる。

### 4 女性に愛される地理教育を目指して

筆者の地理教育に関する当面の課題は、中学や高校の女生徒達に受け入れられるカリキュラムの開発である。それは結局、文化地理学、或いは人文主義的地理学など、人文科学としての地理学を基礎とし、発達心理学や文化人類学などの諸成果を採用したものとなってくる。

実際、現在の地理教育は、いわば、無理を承知で、自然地理学のうえに経済地理学を乗せたようなものであるが、これでは人間不在、無味乾燥の地理学といわれても仕方あるまい。

地理学のキーワードである環境一つをとってみても、従来の様に、単に所与のものとしてはとらえきれぬものではない。その地域の住民のもつ文化の体系に内在する自然観や環境観をフィルターにして、はじめて環境像はあらわれるものだからである。こうした視点に立てはじめて自然環境も人間のものとなってくる。女性も十分に満足できるはずの思索の糧となる地理教育もまた可能になるのではあるまいか。

こうした新しい地理教育の研究は、まだようやく緒についたばかりである。今後の研究の進展には、やはり自らの人生を探検し得る多くの女性の参加が、何よりも期待されるのである。

(東京学芸大学)

## フルカ峠の郵便バス

### 新 井 正

1983年夏、フランス、リヨン市で開催された国際陸水学会に参加した後、スイスを旅行した。スイスでは連邦工科大学(ETH)の大村教授のお世話で、実験流域の見学、湖沼研究者との意見交換、氷河の調査などを行なったが、その旅行の最後はローヌ氷河の研究施設の見学であった。さきに滞在したリヨンがかつてのアルプス氷河の outwash plain の末端であったから、この旅行はかつてローヌ谷に展開した大氷河の跡をたどったことになる。ローヌ氷河では氷河上や末端のモレーン上に多数の気象観測点が設定され、地理教室の大学院生が研究を

行なっていた。データのほとんどがコンピューターで処理されており、観測の手数はほとんどかからないようであった。

ローヌ氷河では19世紀以降のモレーンの後退が確実に記録されており、ホテルの廊下にも文献のコピーが多数展示されている。私は夏中この実験地で過す大学院生のアンドレの案内でモレーンや氷河や実験機械を見学し、フルカ峠まで送ってもらった。私はここから郵便バスと鉄道でチューリッヒに帰り、アンドレは麓の観測所へもどる。